

# 復興事業の観光への影響

## — 東松島市野蒜・宮戸地区の事例

西脇 千瀬<sup>1</sup>・奥村 誠<sup>2</sup>

<sup>1</sup>非会員 東北大学災害科学国際研究所 (〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉468-1)  
E-mail: chise.nishiwaki.a6@tohoku.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 東北大学災害科学国際研究所 (〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉468-1)  
E-mail:mokmr@tohoku.ac.jp (Corresponding Author)

東松島市野蒜地区及び宮戸地区は特別名勝松島にも指定されている古くからの景勝地であり、観光産業が盛んであったが、東日本大震災の津波で大きな被害を受けた。被災地域では主に安全性の観点から土地利用の見直しが行われ、道路や橋梁等が新たに整備された。震災から11年が経過し、復興事業も一段落したが、このような事業が観光にどのような影響を与えているか、野蒜・宮戸の事例を紹介する。

**Key Words :** *sightseeing, tsunami, case studies.*

### 1. はじめに

宮城県東松島市の野蒜地区や宮戸地区は、隣接する松島町等と共に特別名勝松島に指定され管理区域とされており、古くから景勝地で知られてきた。ここで野蒜地区と宮戸地区とは東松島市の中で松島湾に接している地域(図-1で示した地域)を指している。

野蒜地区には仙台初代藩主伊達政宗が命名したとされる不老山や、四代藩主伊達綱村が名付けたと伝わる余景の松原があり、また野蒜海岸は海水浴場として知られる。

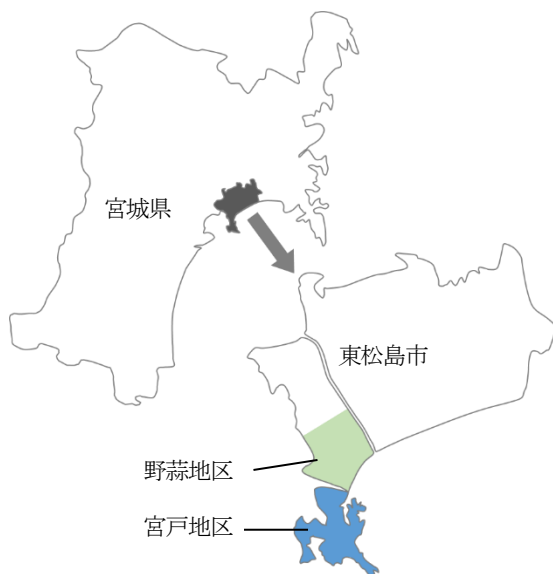


図-1 野蒜地区と宮戸地区の位置

古くは宮城電鉄(現 JR 仙石線)が昭和6(1931)年に野蒜駅を東北須磨駅と改称し宣伝したこともあり、鉄道駅至近の野蒜海水浴場は多くの客を集めた。戦後になると次第に移動手段が自家用車になる等の変化はあったが、東日本大震災前まで宮城県内では有数の海水浴場であった。また明治時代初頭に日本最初の近代港湾建設事業である野蒜築港が行われた地でもあり、規模は大きくないものの野蒜築港資料室という見学施設が設置されていて、歴史に興味のある人々が訪れ、また小学生の地域の歴史学習の拠点となっていた。

一方、宮戸地区には松島四大観と呼ばれる展望地のうち最も標高の高い大高森や、また松島の外海の景観である嵯峨溪がある。昭和30年代には野蒜地区と一体的に「奥松島」として観光地化を進め、嵯峨溪を巡る遊覧船や民宿等、観光に関連する産業も盛んになっていった。更に宮戸地区には日本最大級の貝塚である国史跡の里浜貝塚があり奥松島縄文村歴史資料館が併設されている。ここでは展示だけではなく、貝紫染めや縄文の塩作り等、一年を通しさまざまな体験イベントを行っており、東松島市以外からも多くの参加者が訪れていた。

以上のように両地区は、地域の歴史や景観を活かした観光産業が行われていた。

平成23(2011)年の東日本大震災における東松島市の被害は甚大だった。野蒜では東松島市全体の半数近くという非常に多くの犠牲者が出ており、また宮戸は野蒜地区と繋がる橋が損壊し孤立し、また多くの家屋が損壊・流失する等の被害があった。東松島市では住宅の高台移

転、かさ上げ道路、複数の防潮堤建設等、防災・減災を掲げたまちづくり計画をたて、事業期間は平成 23 (2011) 年からの 10 年とされた。野蒜・宮戸両地域でも道路整備や高台移転が主な計画とされ事業が行われてきた。そして令和 3 (2021) 年度末には予定通り殆どの工事が終了している。

東日本大震災の被災地には第一次産業を主な産業とする地域が多かったが、野蒜地区は第一次産業従事者の割合は全体の数%と少ない地域である。そして野蒜・宮戸地区は観光も盛んな地域という特色をもつ。一方で復興事業は主に安全性の観点を最優先に選択されてきた。このような地域において復興事業は観光にどのような影響を与えたか、事例を紹介する。

## 2. 野蒜地区の状況

### (1) 野蒜地区の復興まちづくり

野蒜地区は鳴瀬川の漂砂を主として形成された地形であり、標高が低く津波被害も大きくなった。図-2のように野蒜地区には地域を南北に分ける形で JR 仙石線の線路と、野蒜築港時に造られた東名運河が通っていたが、この運河より南の地域は住居の建築に強い規制がかかり、事実上建築禁止区域となった。新たな防災集団移転先として背後の丘陵地に野蒜ヶ丘地区を造成し、JR の線路も同地域に移設された。大規模な工事となったため引き渡しに最長で 7 年かかっている。また運河より北の一部は住居の建築規制がないため、その地域に移転した家も少なくない。

野蒜海岸には TP7.2m と TP10m の防潮堤、その間に TP6.2m のかさ上げ道路が整備された。また海岸から造成された高台へ直結する市道が 2 本、運河に橋梁が 2 ヶ

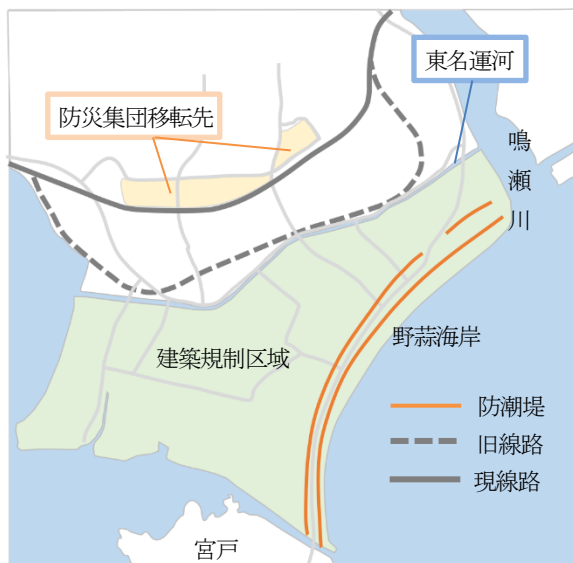


図-2 野蒜地区

所新設された。震災時には海岸から直接高台へ向かう道がなく、また運河の橋梁も少なく、避難する車両で渋滞が起こっている。当時の状況と比較すると、高台への避難は容易になったといえる。また野蒜海岸の近くには令和 3 (2021) 年に震災後寄贈されたコンテナハウスを再利用した避難施設が防潮堤上に完成し、防潮堤全体の竣工と合わせ、令和 4 (2022) 年から海岸の利用が可能となった。

### (2) 野蒜地区の観光の状況

かつて野蒜の名所として絵葉書にも多く取り上げられた不老山は津波での大きな被害はなかったものの、野蒜海岸の防潮堤の端が接続している状態となっており、埋没している印象を受ける。今後の観光利用が計画されているようには思われない。一方で余景の松原は津波で松が流失したり枯れたりしたものの、新たに植林されており再生の途上にある。

震災以前の野蒜地区にはかんぼの宿松島、奥松島ユースホテル、宮城県松島自然の家、民宿等の宿泊施設があり、また飲食店や釣道具屋も複数あった。(1)で述べたように野蒜の多くの地域で居住が不可能となり、東名運河より南側の海岸に近い地域にはほぼ何もない状態となっている。土地利用としては一部で農業と太陽光発電が行われている程度である。民宿や飲食店のほとんどは移転による再建等はされなかったが、そもそも経営者が高齢化しており、震災を機に廃業したものが少なくない。

令和 4 (2022) 年 7 月に 12 年ぶりに開設された野蒜海岸海水浴場は 2720 人の来場に止まった。平成 22 (2010) 年の 4 万 8000 人と比較すると大幅な減少である。要因は様々あるが、後述する宮戸地域の月浜海水浴場が前年から半減しながらも 9618 人の客数があったことを考えると、天候に恵まれなかったことや新型コロナウイルスの感染拡大等のほかに、来場者数の減少要因があると推測される。野蒜海岸海水浴場は 12 年ぶりの開催でありかつての海水浴場の記憶が薄れてきている可能性もある。また砂浜に海の家は設置されたものの、JR や住宅地が内陸に後退し、更に移転跡地の利用が殆どされていないことで海岸への連続性が失われ、隔絶された印象を与えている。

一方、東名運河の北の地域には集客を期待する施設が整備されている。被災した旧野蒜小学校跡地は防災体験型宿泊施設「KIBOTCHA」に、旧野蒜駅跡は東松島市震災伝承館となった。また令和 3 (2021) 年には、旧野蒜駅の近くに「奥松島クラブハウス」という飲食店と庭園、ギャラリーが入っている施設がオープンしている。ギャラリーは、東松島市矢本にある航空自衛隊松島基地のブルーインパルス専属カメラマンの写真が飾られており、ブルーインパルスの見学に訪れた人が立ち寄っている。

「亀岡ベース」というカフェやドッグランを併設した水上アクティビティの拠点も令和 3 (2021) 年にオープンしており、飲食店は徐々に増えている。

更に高台には「いろどりの丘」という介護施設やクリニック、カフェ、お風呂、ホテル等の複合施設、奥松島レーンホテルも開業し、野蒜海岸から離れた位置には宿泊施設や入浴施設ができていくことがわかる。

ただし、東松島市震災伝承館は他の被災地の伝承施設と比較すると小規模で展示も限られており、また駅舎についた津波の痕跡などを消す等、見学者へ伝えたいものが分かりにくい。また、「奥松島クラブハウス」と「いろどりの丘」は県の補助金を利用し市外から誘致したものであり、今後長期的に現在と同様な運営が可能かどうかは定かではない。そして前記したように不老山は防潮堤の一部と化し、野蒜築港資料室の復活の予定もなく、東名運河の活用もされていない。今のところ地域に存在した観光資源を活かすという方向性ではないことがわかる。

しかし、地元では、これまでは居住者のための安心・安全なまちづくりや漁港や田畑の復旧を最優先として事業が進められてきたのであり、まちづくりが一段落したこれから、観光にも力を入れていけるという声も聞かれる。

### 3. 宮戸地区の状況

#### (1) 宮戸地区の復興まちづくり

前記したように大規模な貝塚が確認される宮戸地区の人々の歴史は縄文時代に遡り、地形や自然環境、暮らしぶり等は当時から大きくは変化していないといわれている。里浜、月浜、大浜、室浜という 4 つの集落があり漁



図-3 宮戸地区

業と農業を主要な産業としてきた。津波被害を受け宮戸でも低地には建築規制がかかり、高台への防災集団移転が行われたが、集落毎に移転地を選定しそれぞれに造成された。また各浜は松島湾内の海岸と分類され、TP3.1-5.3mの防潮堤が設置され、漁港も復旧した。

野蒜地区と宮戸を結ぶ松ヶ島橋は震災で損壊し、一時宮戸地区が孤立したことから、新たに整備され令和 3 年に開通した。以前よりも高い位置に橋桁が架設され、以前は不可能だった遊覧船の橋の下の通行が可能となった。

また、震災以前の水田は鳴瀬川上流から水を引いていたが、このポンプが損壊したため水田の復旧には設備の復旧も必要であった。高齢化が進むなかで新たな負担となることから、ポンプの復旧はせず水田は畑にする等、利用を変更している。特に大浜では津波で浸水した地域が地盤沈下し、水田を含めた広い範囲がかつての地形である湿地に戻り、その旧地形と湿地環境を大浜田湿地として復元するという選択がとられた。

一方で高齢化と過疎化は急速に進行している。特に子育て世代が野蒜の高台に移り住んでいる例が少なくない。小学校や中学校には通学用のバスがあるが、高校以降に利用できる公共交通機関がないため、JR の駅が至近で地域への移転が選択されているという。また、地域の殆どが市街化調整区域であるために新たに住宅を建てて移り住むことが簡単ではなく、市では空き家の活用等により移住支援をしているが、なかなかうまくはいっていない。

#### (2) 宮戸地区の観光の状況

宮戸の中央部に位置した宮戸小学校は、震災後に野蒜小学校と統合することが決定した。新しい小学校は野蒜地区の高台に新設されるため、宮戸小学校の跡地に震災前に野蒜地区にあった宮城県松島自然の家を誘致、令和

嵯峨溪遊覧は平成 25 (2013) 年に再開され、遊覧船の発着所近くに案内所が併設されている復興再生多目的施設「あおみな」が平成 27 (2015) 年に開業した。あおみなでは食堂もあり、特産品の販売やレンタサイクルの受付もしている。

奥松島縄文村歴史資料館は津波による被害が比較的少なく、震災後は災害対策や炊き出しの拠点となり、また文化財レスキュー等を行っていたが、平成 24 (2012) 年 3 月には資料館として再開した。市内外から見学客が訪れており、特に体験イベントではリピーターが少なくない。

前記したように月浜では平成 25 (2013) 年に海水浴場を再開しており、令和元 (2019) 年には 2 万人近い来場者があった。また周囲の民宿も次々と再開し、宿泊だけではなく漁業体験なども提供している。

更に、韓国発祥のトレッキングであるオルレのコースが平成 30 (2018) 年、宮城県内 4 ヶ所にオープンしたが、そのうち 1 ヶ所が宮戸に設置されている。あおみなを拠点とし、里浜貝塚や大高森、月浜海水浴場等、宮戸の各地を巡る 10 km のコースを多くの人が訪れている。大浜田湿地も令和 3 (2021) 年からオルレのコースに組み込まれている。

以上のように宮戸ではもともとあった観光資源や、地域そのものを活かした観光が進められてきた。大規模な施設の導入等を行っていないため、経費も抑えられると考えられる。

#### 4. まとめ

東松島市の野蒜地区と宮戸地区の復興事業と観光の現状についてみてきた。野蒜では安心・安全なまちづくりが最優先で行われてきた。そのための高台移転に伴いかつては一体的だったまちや JR が海岸と隔絶する等、復興事業による影響は少なからずあった。また復興事業そのものが優先されることで震災前の観光資源が放置された状況になっており、震災前からの観光資源を活かしたような観光事業は現状では殆ど行われていない。

一方で宮戸では復興事業による土地利用の見直しを活

かす等、震災後に更に地域の自然や景観を利用した観光事業を創出していた。

このように 2 つの地域で差が生じた要因として、まず犠牲者の数の違いが考えられる。500 人以上の犠牲者が出た野蒜に対し、宮戸では人的被害は殆どなかった。野蒜では何よりも安心・安全が希求されたことは間違いのない。

また被災した面積の差もある。低地が少ない宮戸に対し、野蒜は砂が堆積した土地であり、震災前のまちは全体が低く、跡地が膨大に残された。野蒜地区で行われた施策をみると、民間に委託し土地利用をしてもらう傾向があり、広大な跡地の処遇には時間がかかると思われる。

また、両地区で聞かれたのは、観光で潤うのはごく一部であり、まち全体が食べてはいけないという声だった。そのため、野蒜において観光は生活が安定した上での「いろどり」であり優先事項にはならなかったという。確かに災害直後は生活や生業の復旧が何よりも優先される。しかし、長いスパンでみると、地域の独自性を担保するような観光資源はかけがえのないものであるといえる。非常時である災害後に、観光をどのように位置づけていけるかは今後も課題といえよう。

(?)

## Impact of Reconstruction Projects on Tourism - Case Study of the Nobiru Area and Miyato Area, Higashimatsushima City

Chise NISHIWAKI, Makoto OKUMURA

The Nobiru and Miyato area of Higashimatsushima City have long been famous scenic area with a thriving tourism industry. The area was severely damaged by the Great East Japan Earthquake and Tsunami. In the affected areas, land use was reviewed mainly from the viewpoint of safety. Eleven years have passed since the earthquake, and reconstruction projects have come to an end. The following is a case study of Nobiru and Miyato to see how these projects have affected tourism.